

2023年 宗会（常会）宗務総長演説（要旨）

2023年6月1日

ご参会、誠に有難うございます。

宗会の開会にあたり、慶讃法要完遂の意義と、2023年度宗務執行の基本方針について申し上げます。よろしく願いいたします。

はじめに、5月5日に発生した能登珠洲地方を中心とする地震により被災された皆様、今なお不安の中にある皆様方に、心よりお見舞いを申し上げます。

先日私もお見舞いにあがり、被害状況を目の当たりにしました。あるご門徒宅にお伺いした際、家の補修がされていない状態でありましたが、お内仏は既にきれいにお荘厳がなされていました。お聞きすると、地震で倒壊したお内仏を何より先にご修理なされたとのこと。

地震が続く不安な日々の中、真っ先に「お内仏を」というお心、お姿に触れ、真宗生活の大事を改めて教えられた思いでした。

引き続き、宗門として、支援物資や救援金勸募等の復興支援に力を尽くす所存であります。

【慶讃法要完遂御礼】

さて、今議会の冒頭にあたり、改めて御礼を申し上げます。去る4月29日の結願法要と、5月5日の「子どものつどい in 東本願寺」をもって、おかげさま

で「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」が整齊に完遂されました。

ここに宗務総長として、また稀有なるご法要にお会いできた一人として、宗門の皆さまに衷心より御礼を申し上げます。本日ご参会の議員各位をはじめ、ご法話の先生方。法要加勢、スタッフの皆様。京都市及び下京地域の皆様、関係各位に深甚の感謝を申し上げます。誠に有難うございました。

このたびの慶讃法要は、テーマ「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」のもと、お迎えいたしました。ここに示されますとおり、ご法要の意義は、今現に私たちが頂戴しております本願の名号である「南無阿弥陀仏」、信國淳先生のお言葉をお借りすれば「仏の教育的生命」を今日に回復する。今いただき直す。そういう大切な機会でありました。

同時に「子どものつどい」では、「法要には終わりはありません。常に始まりです。ここに集うた人は、どうか50年後に、ご縁のある子どもたちを真宗本廟へ送り出してほしい」と、お子さんたちに申しました。

今回の法要儀式は、史上初めて、御影堂・阿弥陀堂の両堂において同時の勤行でした。そこに、はからずも教えに遇うことのできた「遇教」の事実と、「濁世の機」たる我が身の事実とを体感する、誠に荘厳なものでありました。

殊に、全座において「儀式の主宰」を勤められた大谷暢裕門首、並びに裕新門に、重ねて御礼を申し上げます。宗憲に基づく「真宗大谷派門首」の具体、「留守職」としてのお姿と、重く受けとめております。

【真宗本廟における慶讃法要の受けとめ】

このたびの慶讃法要は、「宗憲改正後、初めての慶讃法要」でした。ですから法要に遇い得た私たちは必然として、宗憲改正の原動力である「同朋会運動」、その精神に立ち帰る。昨年、基本姿勢として掲げた「真宗再興」を期す、その意を確かめ、根底に据える歩みが求められています。

慶讃期間中、そこには多くの出遇いがあり、さまざまに法縁が生まれました。私にとって今回の慶讃法要は、一言で申すなら「値遇の機会」でありました。人と遇い、法と遇う。宗祖のお言葉で申せば、「遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。」という重大事、仏の御名を呼ぶことによる出遇いと交わりが創出された、かけがえのない機会で行いました。

先日、知人の住職から聞いたことですが、今回、遠路初めて真宗本廟に参拝された方が、帰りにこう申されたそうです。「住職、今日のことを一生忘れない。満堂の門徒と一緒に勤めし、堂内に響いた『正信偈』に、身が震えた。本当に有難うございました」と。

私は、深く感銘を受けると同時に、大切なことを私は忘れていた。いつの間にか、またしても大切なことを「当たり前」にしていたと感じました。その「忘れ物」について、今から申し上げたいと思います。

このたびの慶讃期間中、京都国立博物館にて「親鸞 生涯と名宝」展が開催され、連日多くの人々が大変貴重な出展群を目の当たりにしました。私は何度も足を運び、そこに「親鸞・その人」を感じずる時間をたまわりました。

最重要の展示物である聖人直筆の『教行信証』は、まさしく「信心の日記」と言えましょう。30年間お手もとに置き、筆を入れられ続けたその「坂東本」『教行信証』は、世界の負託を受けて、当派が所蔵しております。

慶讃事業に特段のご尽力をたまわりました三木彰円先生によれば、坂東本『教行信証』は、いわば「呼びかけ」の書物であると。宗祖が今、私たちに等しく、親しく、呼びかけてくださっている。その肉筆を通して、聖人のお声を私たち一人ひとりが感じ取る、一生涯聞いていく。それが坂東本に触れる上で最も大切な一点であるのご教授いただきました。私も全くその通りと思います。

浄土の真宗の表現である坂東本『教行信証』。真宗再興を期す「同朋会運動」。その運動を形に表した「真宗大谷派宗憲」。その宗憲において全宗門人の帰依処と誓われている「真宗本廟」。これらは全て、私たちに、既にして与えられているものであります。しかし、決して「当たり前、手にしているもの」ではありません。この点、各位も首肯されることと思います。

しかし、改めて自身を顧みれば、先ほどの「『正信偈』の声に身が震え、一生忘れることはない」と仰るご門徒のような感銘をもって、私はこれらを受けとめてきたでしょうか。蓮如上人の「馴れては、手すべきことを足でするぞ」の警句のとおり、どこか「なれて」しまっている。最も大切なことを忘れていないか。もう一度、重大事が自分に与えられてある事実に向ける、真摯に受けとめ直すことが必要だと、慶讃法要での出来事を通して強く感じました。

昨年、私はこの場において、宗門の生命線は同朋会運動である。それは一人ひとりが「真宗再興」を期す信仰運動であり、「人間が人間であることを取り戻す」根源的誓いに基づくものであると申し上げました。

その上で、慶讃法要を経た今、注視する一点は何か。それは「足もとを明らかにする」ことではないかと思えます。月並みに聞こえるかもしれませんが、「自分の足もと」、「立っているところ」が明らかになる、それは大乘仏教、浄土真宗の根幹でありましょう。すなわち宗祖聖人の求道の歷程において、この点が紛れもなく大きな課題であった訳です。

宗祖はこれを、『教行信証』信巻の序、いわゆる「別序」に表現されております。信巻は『教行信証』の構造で申しますと『正信偈』の次になります。『正信偈』は、宗祖のいわば信仰告白。念仏の教えに遇えたこと、それを自分に届けてくださった師友・善知識の徳を讃嘆された、「宗祖渾身の仏教讃歌」であります。感得された遇教と師訓の恩徳を、讃歌をもって表現されました。

しかし、『教行信証』はそこで終わりません。宗祖はそこから意を決して別序を起こされ、以降、化身土末巻まで文字通り、稀有最勝の畢竟仏道を表現されています。

その別序には、信心はどこまでも「如来よりたまわりたる信心」であること。そしてその信心は、釈尊の「善巧方便」により明らかにされていることが述べられています。その後が、私は現今、第一の問題ではないかと読み返しております。

「しかるに末代の道俗・近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す、定散の自心に迷いて金剛の真信に昏し」と表現されています。

僭越ながら、ここの要点は「自性唯心に沈む」、「定散の自心に迷う」ということで、つまりは「自分の思い」に沈み込み、思いに振り回されているため、せっかくの如来の願心と御方便があるにも関わらず、他の人ではなく、自らが「浄土の真証」を貶めている。「金剛の真信」に昏く、見えないでいる。「念仏を疑

う」ということが起こっている。宗祖は、ご自身を含めた極めて現実的な問題を、ここで提起なさっているのであります。

足もとが明らかでない。一見、進んでいるようで、どちらに向かっているのが判然としない。よく分かっているつもりで、ひたすら思いに振り回されている。そういう疑いようなのない身の事実が、教えによって明らかになったと仰います。

ですから、宗門はむろん、これから先に多くの重要課題がありますが、その歩みによって、足もとが明らかになること。この点を要の課題として受けとめない限り、宗門に、私たち一人ひとりに、「方向」を見出すことは出来ないものと思います。真宗再興の上人・蓮如上人は、「行くさきむかいばかりみて、足もとをみねば、踏みかぶるべきなり。人の上ばかりにて、わがみのうえのことをたしなまずは、一大事たるべき」と仰います。南無阿弥陀仏によって気づかされる「仏の教育的生命」に会うことがなければ、ただ闇雲に先を妄想してしまう。そういうあり方、人と生まれたところに等しく備わっている問題を、痛みをもってご指摘くださっています。

教わることがなければ、気づくことのできない人間に向けての教えは、「念仏申せ」であります。ここは明瞭です。にも関わらず、それに対して「はい。」と反応できない私。それを宗祖は痛みをもって「濁世の機」と云い、よくよく案ずれば偏に「このような私」のために起こされた本願でありましたと、生涯をかけて真実信心を明らかにしてくださいました。

したがって私どもは、今こそ宗祖のご教示に基づき「足もとを明らかにする」一点を、今後の「要の課題」とする必要がございます。ここに、真宗本廟における慶讃法要の受けとめとして、その覚悟を新たにいたす次第であります。

【本廟を基（もと）とする教団】

さて、その「足もと」という問題は、何によって受けとめ、問い直されるべきかと申せば、これは言うまでもなく坂東本『教行信証』であります。聖人一流にあずかる私どもは、問題を常にお聖教に聞き尋ねていくことが基礎であります。その上で、先に触れました、既にして受け取っている「同朋会運動」、「宗憲」、「真宗本廟」を自らの課題として受けとめることができるのでありましょう。

一人の信を課題とする「同朋会運動」。教団の形を表わす「宗憲」。そして、現実の教団を受けとめる上で、欠かすことのできない「真宗本廟」。これらの重大事を通して、感覚される課題をお聖教に尋ねる。そこに、おのずと足もとが明らかとなり、「方向」が与えられてまいります。人は、足もとが見えなければ進むことも退くこともできません。しかし、足もとがはっきりすれば、一步、また一步と歩むことができます。現状をつぶさに把握するということは、決して現状に留まることではなく、そこに向かうべき道、方向が、「おのずと」明らかになるのだと感じます。

その点から申しまして、今、宗門の「これから」を考える上で、殊に慶讃法要を通して気づかされた、どうしても押さえておかなければならない一点がございます。それは、現実の教団と「真宗本廟」ということについてであります。

各位ご承知のとおり、真宗本廟については、宗憲前文において、宗門運営の根幹にその基本が明記してありますが、その前の部分に「宗門の原形」、「はじまりの一滴」が述べてあります。少し読みますと、「宗祖聖人の滅後、遺弟あい図って大谷の祖廟を建立して聖人の影像を安置し、ここにあい集うて今現在説法

したもう聖人に対面して聞法求道に励んだ。これが本願寺の濫觴であり、ここに集うた人びとが、やがて聞法者の交わりを生み出していった。これが我が宗門の原形である。したがって、この宗門は、本願寺を真宗本廟と敬仰する聞法者の歓喜と謝念とによって伝承護持されてきた」と。また、覚如上人『報恩講私記』においても、諸国から群詣して「廟堂に跪ずきて涙を拭い、遺骨を拝して腸を断つ」とあります。

宗憲前文においても、覚如上人においても、廟堂に集われた人々の「その後」については、あまり具体的に表現されておりませんが、実は「そこから」私どもの教団は成立してきている歴史的事実があります。

聖人を想い、毎年廟堂に集われた先達は、参拝を終えて皆ふるさとへ帰り、その土地に集いが生まれ、道場ができ、お内仏が開かれる。お念仏の集いが全国に生まれていく。そうして今日に至っているのが、私どもの教団であります。

これに関して、今から24年前、柘植闡英先生は、「御真影のましますところが本廟だと。歩みを運んだ人は本廟の灯をいただき、帰って道場を建て、灯を立てました。その灯をいただいた人は、門徒になられ、我が家を道場にしていきました。（中略）そのように本廟の灯をもって真宗教団が立てられていきました」と申しておられます。

私は今、慶讃法要に遇い、教団のこれからを見据えるについては、この点を改めて受け取り直す必要があると、強く感じております。

今、大変厳しい時代状況にあっても、私どもは決して諦めずに、教団の「方向」を模索し見据えていかねばならない。その時に、ただ先を描くのではない、「われら」として今一度、「教団の成り立ち」を静かに受けとめる必要がある。

「教団の足もと」、即ち「我々自身の足もと」、その背景を明らかにすることが要となってまいります。

聖人の御真影の前に跪いた先達方の「ものがたり」に、実は続きがあった。廟堂に集い、信心の灯をいただいた方々は、ふるさとへ帰り、全国津々浦々に「南無阿弥陀仏の声が聞こえる場」を開いてくださった。そうしてお寺ができ、お内仏が相続され、そのおかげで私たちは今、念仏のいわれ、浄土真宗という「大乘の至極」に触れることができます。実際に「南無阿弥陀仏」がこの自分に聞こえているのです。このことを幸せと言わずして、何を幸せと申せましょうか。

振り返りますと、「宗本一体」から今年で36年であります。ご承知のとおり、「教団問題」において、宗派から本山が離脱するという危機を乗り越え、得ることができたのが今の姿であります。このこと一つを想いまして、真宗本廟の存在は、決して「当たり前」と済ませられることではありません。

この本廟は悠久の時を超え、苦難の歴史をくぐって今、私たちが無量無数の先達から受け取っているものである。その背景に我が宗門の原形があり、教団組織の成り立ちの基礎があるのだと感じております。

そういう意味で、宗門のこれからは、改めて真宗本廟の存在を一人ひとりが受け取り直すところに始まる。あらゆる機会を通じて、「本廟を基とする教団」ということを、自分自身が確かめ直す。そこに「同朋会運動の必然性」も確かに受け取られてまいります。

思えば、12年前の宗祖御遠忌の基本理念は、「宗祖としての親鸞聖人に遇う」でありました。親鸞聖人に直参する。単なる歴史上の人物ということを超えた、自分自身の「宗祖」として親鸞聖人に遇う。このことを基本に据えての御遠忌で

ありました。その理念のもとで、真宗本廟両堂等の御修復は全うされたのであります。

この四半世紀において、私たちには3つの大法要を経験した「責任と使命」がある。1998年の蓮如上人御遠忌は「慙愧という課題」を、2011年の親鸞聖人御遠忌は「宗祖という宿題」を、そしてこのたびの慶讃法要は「師友との出遇いという機会」を、私どもに与えてくださった。これらの重大な節目に遇い得た一人として、宗門のこれからを背負っていくことが、私たちの共なる使命であろうかと存じます。

「本廟を基とする教団」。この一点を、改めてお互いに確かめ直してまいりたい。そして実際の取り組みでは、「足もと」が明らかに知らされる、現在の状況と背景とをつぶさに把握する、その努力を惜しまず、同朋会運動の推進に尽力いたす所存であります。

【2023年度の主な施策】

これよりは、次年度の諸施策の方針について、細部は提案趣旨、予算、及び内局提出資料に譲り、5つの要旨を申し上げます。

なお、「教化研修計画」全体にかかることとして、事業及び施策の視野は、基本的に3ヵ年度を一体視するよう努めております。これは既に2014年度から今年度までの9ヵ年を、3期に区分して進めてきた一環であり、現況の宗務における有用な工夫として継続するものであります。

1点目は、「慶讃事業の継続」について。このたびの慶讃事業にあって、コロナ下の状況により止むを得ず延期したもの、特に青少幼年関係の大事な施策は、

今年度末に発刊する「青少幼年教化指針（改訂版）」や子ども会の『手引き』等を用いながら、順次実施をいたします。加えて、青少年にお聖教や『教行信証』等の宗祖の著作に触れていただける、『真宗児童聖典』も発刊いたしますので、教化の現場で活用いただくことを願っております。

また、「教区での慶讃法要」については、宗祖の御誕生と立教開宗を自らの学びとできるよう、『教行信証』坂東本を底本とする『真宗聖典（第2版）』をはじめ、坂東本に関する書物の出版化等、あらゆる人々が「坂東本」に触れていく機会として取り組みます。

教区において向後3ヵ年度を目安に計画が立案・推進されることを推奨し、「次世代に確かな宗門を手渡していく」契機といたしたいと思います。

2点目は、「是旃陀羅の課題」について。これについても重要課題としての取り組みを継続いたします。この問題は、時代を超えて指摘されてきた、「如来よりたまわりたる信心」の実際問題であります。今一度、武内了温先生ら先達の視座に立ち返り、経典をどのようにいただいていくのか、その足もとを明らかにするため、教区や組に出向いて、現場の声や実情に応じた学びの機会を展開してまいります。

具体的に次年度からは、趣旨の周知とともに学習テキストの作成、及び教区や組における学習会の講師養成等を着実に進め、宗門がこの課題を保ち続けられるよう、丁寧に歩みを続けてまいります。

3点目は、「宗務改革」について。現在、行財政改革について条例による委員会が進行中であり、その協議を丁寧に進めることを第一義とし、教区・組の改編

の推進、門徒戸数調査の継続点検についても、関係条例に則り、教団の背景と現状を確かめつつ、総合的に取り組みを進めてまいります。

また本年は、今宗会を経まして、新潟・富山・小松大聖寺の新教区が誕生いたす運びであります。関係各位のご尽力に対し、深甚の敬意を表するものであります。

4点目は、「教勢調査」について。今常会に「統計調査基本条例」の一部改正案を提出します。主意としては、激変する社会において統計調査をより積極的に宗務に活かすためであります。教団の「足もと」、現在状況をつぶさに把握していく一環として、来年1月に実施を予定しております。

5点目は、宗務総長の諮問機関である「宗務審議会」について。次年度は「別院の将来に関する課題」「大谷祖廟の総合整備に関する課題」の審議会設置を予定しており、いずれも「本廟を基とする教団」の重要事項でありますから、その方向性を見定めるための調査審議を進めてまいります。

この他、5つの重点教化施策、聖教編纂事業、教学教化の諸施策についても、3ヵ年度の視野を持ち、真宗本廟における慶讃法要完遂の恩徳を拝受し、推進いたします。

以上、慶讃法要の受けとめ、次年度の基本姿勢、及び施策の要点を申しました。

演説の結びとして、「脚下照顧」という言葉をいただきます。

仏教の自明の言葉としてではなく、仏道を歩む者としての金言として受けとめたいと思います。「他を問題とする前に、自らを明らかにせよ」との戒めの言葉であり、禅宗のみならず、釈尊以後の求道者の姿を表した言葉であり、この言

葉に触発されて、「自らの信心確立が課題である」という求道姿勢を生み出したのでありましょう。

この脚下照顧の金言をどのように捉えれば良いのか。私見ではありますが、我々の「脚下」、つまり足を下ろしている大地は言うまでもなく「念仏の大道」であります。しかし、私はそれを自明の事実として、その大事を忘れていた。「大地を踏みしめるという感覚を失っている」ことへの警語として受けとめます。

脚下照顧は、英語で「Know thyself, look carefully where your footsteps fall」という訳を持ち、世界に広がりを持つ言葉で、「外に求めるのではなく、内に答えはある」と意味します。しかし、聖人の教えを頂く身として、直訳的な理解は致しません。私は「既に賜っている道を足裏で感じる。大乘至極の仏道を踏みしめる」。つまり「念仏申す生活を取り戻す」こと、南無阿弥陀仏により「足もと」が明らかに知らされ、「念仏の大地の回復」を勧めてくださる金言として頂戴します。

「われらの本廟」は、今現在説法したまう聖人との再会の場所であります。そして大法要は「われらの出発点」であります。一人の目覚めが万人の目覚めである。その目覚めこそ、宗門の宝でありましょう。

「無明長夜の燈炬なり 智眼くらしとかなしむな 生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ」。既に我々の足もとは照らされているのです。念仏を信頼し、念仏申す。このことを全ての始まり、「真宗再興」の全容といたしたく、「念仏の声が響き渡る場の回復」のための施策を紡いでまいります。

「同一に念仏して別の道なき」一大事を、ご一緒に聴き尋ねてまいりましょう。

末尾となりましたが、昨年、参議会金沢教区選出の蔵本久雄議員がご逝去されました。共に念仏申し、同朋会運動を歩まれた同行として、ここに深く哀悼の意を申し上げる次第であります。

ご清聴、有難うございました。

以 上